

## 生涯の師と二人の師



井本常蔭と磯丸

隣村の亀山村に井本常蔭という役人（郡奉行）が住んでいました。常蔭は和歌を作ることが大変に上手で、学問にも武道にも優れた人でした。

常蔭は新之丞のうわさを聞くと、自宅に招き入れ、和歌や読み書きを熱心に教え、「磯丸」という名前をさずけたのでした。磯丸という名前をもらった新之丞は、ますます歌を作ることになり、最初の先生であった常蔭を、一生涯「師の君」として尊敬

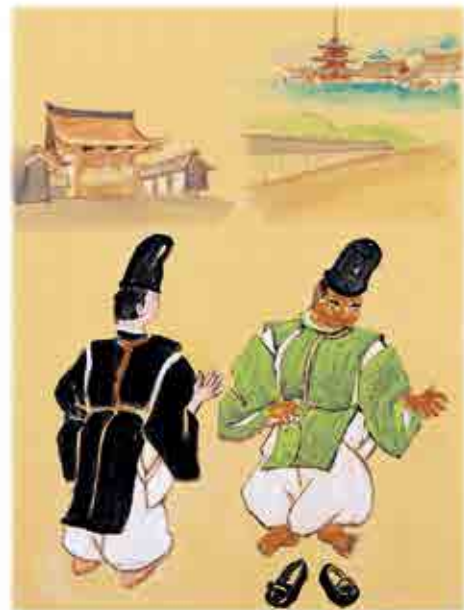
しました。

文化元年（1804）、磯丸が40歳の時、吉田（現在の豊橋市）の女流歌人「林織江」が伊良湖周遊の旅をし、織江の荷物を持って案内をしたのが磯丸でした。織江は磯丸の作った和歌に大いに興味を持ち、自分の先生であった京都の「芝山大納言持豊」に紹介しました。持豊は磯丸をたいそう気に入り、自分の弟子に加え、「貞良」の名を与えました。

磯丸はこの後、度々京都の持豊を訪ね、持豊やその家族に親しまれました。磯丸は、一般の人が見ることのできない宮中の行事や歌の会を間近にし、見聞を広めることができ、磯丸の歌はますますうまくなっていきました。



林織江と磯丸



芝山大納言持豊と磯丸